

一九七七年二月一〇日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社

発行人 滝野 忠

東京都渋谷区本町六丁目二八の二コトポ幅ヶ谷九〇四 電話(03)337714649

FAX(03)329915367

購読料 月額500円 6カ月前納制

〈もくじ〉

■巻頭言■

岩井 章、福田 徹氏おおいに語る……………2

かたい決意を、明るい顔で闘いぬこう 岩井 章……………3

——今日の情勢を打開する国鉄闘争の任務——……………9

内田、栗原両候を補推せん……………9

——全労協第四回大会の報告——……………11

反連合「路線」を修正案で可決……………11

——都高教定期大会の報告——……………12

資料 都高教大会「修正案」……………12

「緊急通信」裏方繁忙記……………12

女性たちの熱い思いが燃えた……………13

——新宿歩行者天国の選挙風景——……………14

第十八回先進国サミットと日本……………14

主要労組の定期大会日程……………17

読者からのおたより……………18

好評発売中 ご注文は社会通信へ
『紙ひとえの選択』……………

旬刊 社会通信

NO. 512

一九九二年八月一日

一九九二年八月一日発行

(毎月一日・二日・三日三回発行)

■巻頭言

岩井 章
福田 徹
両氏おおいに語る

期待される構えと態勢の確立

国鉄反合研は、七月四日『正念場をむかえた国労闘争に対する提言』学習会を開催しました。提言した方は、国労顧問の岩井章氏と福田徹権利問題研究会代表の両氏です。

岩井章氏は、総評事務局長を長年努め、戦後の労働運動を指導してきた経歴を持ちつつもこれまで、全ての国労闘争団を訪問し、組合員や家族の生の声に接してきていることはこれまでも本紙において紹介してきた通りですが、こうした貴重な経緯を踏まえて、提言(別掲)されました。

福田徹権問研代表は、半年前のこの正月にも反合研の全国の代表を前に、十二・二六中労委見解を分析してこの五・二八解決案の内容を予測する講演をされていた(パンフ『国労闘争で考える』に収録)わけですが、この三十年、全国の職場・地域で「権問研」活動を組織し、難解な働く者の権利に係わる闘いを組織する、権利工作者としての豊富な情報と、貴重な経験を踏まえての提言(権問研機関誌に掲載予定)をされました。

中労委を舞台にした、話し合いによるJR紛争の解決は、困難になりました。誰が見ても、当事者三組合が受け入れる事は出来ないであろう「解決案」を、中労委が提示したからです。JR紛争で中労委は、犯罪とも言うべき暴挙を、二度も繰り返したこととなります。一度目は、千四十七名に対する二度目の解雇を放置したことです。

五月二十八日に出された、この中労委「解決案」には、国労などが全国十八の地方労働委員会から勝ち取ってきた「救済命令」の片鱗すら覗かせない、つまり、はなからJRの主張のみに立脚した「墮文」でした。

従って、マスコミも呆れるほど中労委の権威を失墜させ、僅かに、政府系新聞を自認するもののみが、「これしか無い」かのような論調を展開したにすぎなかったわけだ。

国労は、直ちに「委員長声明」でこれを拒否、六月十二日には改めて文書で、中労委解決案の不当性を明確にしてこれを拒否、直ちに、JRの再審査申立ての却下を決定して救済命令を発するよう申し入れました(千葉動労は六月二十三日、全動労は六月二十六日に拒否回答)。同時に国労は、「敵より一日長く闘いぬく体制」整備に動きだしました。

まず、当事者、全国の国労闘争団の仲間たちの闘争態勢が問題です。

六月の八、九日の二日間に亘って国労は、国労闘争団の代表者会議を招集、闘争団自らの組織的自治態勢の現状等について交流し、地労委命令に基づく納得ゆく解決を求め、全力で闘い抜く事を意志統一していました。

そして、紛争解決の鍵を握るJR本体の闘いについてです。まず、活動家レベルでの意志統一が開始されました。例えば、東日本エリア内では、本部指導ともあいまって、エリア内各地方本部ごとの全分会長会議が開催されたことです。地労委命令に基づく解決を目指して闘い抜く、闘争団の「解雇撤回・JR復帰」の闘いは自らの「反差別・不当労働行為根絶の闘い」と不離一体の闘いであること。それなくして、JRでの労働条件改善を成し得ないこと、改めてこれらを認識しあうと同時に、JR職場での諸課題を結合させて闘い抜く。そして何よりも、国労組織を拡大しJR内労資の力関係を逆転させることこそが闘争勝利への近道であることをふまえ、全力で闘い抜く決意を固めあったことです。

国労内では、九月四日五日に開催される第五十七回定期全国大会にむけ、各級機関を含めて、様々なレベルでの態勢作りが努力されています。

かたい決意を、明るい顔で闘いぬこう

——今日の情勢を打開する国鉄闘争の任務—— 岩井 章 ——

命令を求めらるるすべて一致

皆さんこんにちは。皆さんが判断するにあたっての情報はもうほとんど一致しているんです。東京地方でも、中關でも地方本部でも、情報についてはだれかが違ったものを持っているというわけじゃない、全部同じだと思えます。しかし、一緒なんだけれども、それを判断するのが人によって少しづつ違いが出るんですね。だから五月二十八日の中央労働委員会の「解決案」なるものが出るまでの全国の動きを、私が外から聞いたり、見たりしていると、実をいうと皆さんの戦線の中にかなり食い違いがありましたよ。皆さんって反合研のことだけをいっているんじゃないかと、国労としてね。ある県評センターの幹部は「早いところ終つてくれ」と。去年暮れまでに私は全国を歩いたんですけれども、ある地方に行ったら「もう物販は必要でなくなった。ことし中には解決するんだ」というようなことを言っている。これは国労の内部の人じゃないんですけど、そういうような動きはかなりあったんです。

何を言いたいかというと、皆さんはこの間の中央委員会で中労委の命令を求めるところで一致したんですね。それ以外に道はないからそうなっているんです。ところが、命令を求めるといふその大きな路線で正しいんですが、とことん考えた上で、これから起こるであろうさまざまなことを全部承知した上で、それを方針として自分の腹に入れていくかどうか。だから中労委の何とかが出るまでには、いろいろなうわさがあつたんですね。例えば今回出されたようなあれほどはつきりと国労をばかにした案じゃなくて、例えば千四十七名のうちの三分の一だけは採用する。三分の二は首だ、採用しません、というような話もうわさであつたんですよ。そういううわさが出てくるということは、中央労働委員会の判断というものに対する幻想があるわけです。私はいつでも言っているんですが、中央労働委員会といえども政府の機関であるから、政府・自民党の枠以上のことはありませんという判断を前にもしているし、今もしているんです。だから命令を求めるといふのは、十年か一五年かという年数のことは今から想像がつくものではありませんけれども、なかなか大変なことだとは思いますよ。相当な覚悟をしなければ。

まっしぐらに命令を求め続けよ

それで起こるであろうと想定されることを少し申し上げて、そういう場面に今から備えておく必要があるんだということを言いたいです。

中労委が地方労働委員会の不当労働行為命令、救済命令以外の判断を下すことはあり得るかという、私はたぶん早い時期にはないと思うんです。地方労働委員会の公益委員も中央労働委員会の公益委員も同じ法律学者ですから、少なくとも学問的良心を尊重すれば不当労働行為であるということを書わざるを得ない。言わざるを得ないから出したくないんです。この間のような「解決案」とかいふ妙な、これは全然法律に関係ありませんから

ね、労使が一致すれば何でもいいわけだから。相変わらず中央労働委員会は出したくないと思っていると私は思いますよ。

五月二十八日のあれが出たときに、朝日新聞の論説に「十年戦争になる」と書いてあった。それから「これは三方一両損である」ということも書いてあった。三方一両損ではない。こっただけ損している案でしょう。だけど論説委員、新聞の限界でなものでしょうね。その十年戦争ということを書いた意味は、ここに少し新聞社の判断があるんですね。つまりこのまま拒否をして命令を求めれば、たぶん中央労働委員会は不当労働行為であるという救済命令を出すだろう。そうするとJ.Rは気に食わないというんで裁判をやるだろう。これを前提にして「十年戦争」という言葉が出ているんです。

私もたぶん中央労働委員会はとことん追い詰められれば命令を書くことは避けられないのかなと思いますけれども、しかし何としても命令を書きたくないと思っているといますよ。「不当労働行為だから元の職場に戻せ」なんてことを言えば、政府・自民党にけんかを売るといふことですからね。

だからどういふことが想像できるかということ、この間の最終解決案に色をつけるということがまず始まると思います。それも一カ月、二カ月じゃなくて、かなり時間はたつと思いますけれどもね。皆さんもうわざも聞いているだろうし、ごく常識的にも感じると思いますが、ただどあの解決案には一つも書いていない。それは連中が次の段階にとつてある色の一つだと思いますよ。そのほかうわさ程度の話はたくさんあるわけだ。二百億は「マル」にするとか、もつとひどい話になると、国労の代々木のアレを売ったのをスムーズに国労の財政に入れることを認めるとかね。なかなかツボを突いてますよね。そういう話があるということとは、当然解決案——どういふきつかけでそうなるかわかりません。今書記長が言ったように会社のほうは拒否するのもしないのか、これもまたなかなか難しいんですね。松崎の立場でいえば拒否させたい。彼らの願っているのは三池方式で、復職、即日解雇を願っているから、一カ月なんてのはもつてのほかだというつもりがあるでしょうね。今の東京、主としてJ.R東は革マルと切っても切れませんから、恐らく少しグズグズするんでしょう。だからどういふきつかけかわかりませんが、私は一番手近に起こってくるのは色をつける。つまりこの間の解決案を少しふくらましていくという作業をたぶんやると思いますが。

しかし、それに幻想を持つてはいけません。もちろん、いけませんなんていわなくたっておわかりですね。本質には全然触れないんですから。ゼニなんかは積まれても首をもとに戻すということを書かない限りはだめなんです。ところが、ふくらます程度の話では、それはやはり言うつもりはないわけだ。

だから私たちは非常に困難な道だけれども命令を求めるといふことをまっしぐらに行くということですよ。

それで命令を求めるといふようにどんな攻めていって、はたして本当に命令を出すことになるかと。中央労働委員会の事務局長の何とか君をいうのは「しまいには出すサ」てなことを言っているそうですけども、私はまだまだ出すという腹は決まっていなと思ふ。それから元労働次官の北川君というのも「最後には出しますよ」てなことをこの間も

ちらつと言っていました。だからとことん追い詰められれば出すということになるんですが、出すまでにかかなりの闘争が必要になると思います。

闘争団の仲間を支える

そこでお互いがどうやってやるかということころなんです。私は第一番目に、こっちの力量をいかにして蓄えるかということだと思っんです。

その力量というのは幾つも材料があるわけです。一番問題は何ととっても闘争団が崩れないことです。私も去年一年かけて全国の闘争団をみんな見て歩いた。決して完全に強いと言えませんよ。しかし、五・二八があまりにもひどいから、これならしようがない、腹を決めるといふ雰囲気だろうと思います。とにかく皆さんが努力して闘争団員の生活——実は生活だけじゃないんですよ、不安てのがあるんです。今の一五、六万円の収入を仮に二十万円にしたって、不安というのが片一方についているんです。おれは将来はどうなるんだらうか。ましてや子供を抱えている人は、子供のおやじとしてはどうなるだらうかという不安は残るんです。それはなかなか解決はできないんです。とりあえずお互いが努力して解決できるのは生活のところです。この間私が中央委員会で、「JRの皆さん、あと二千円ずつ余分にカンパしてくれ」って言おうとしたら、「それは待った」とかかりまして、ちょっと言わなかつたんです。それはこの間の討論を見ればわかるんです。この間の千円カンパがまだ一〇〇%いっていかない。地方はほぼいっているようですね。一番大部隊である東京はなかなか難しい。だから新たに千円カンパ追加することはとりあえずやめるとして、今まで既に決められている千円カンパをとことんやるということをしてJRの労働者に訴える。それから物販をやる。その他デールとかいろいろのことがあります。とにかく闘争団の生活をお互いがどのぐらい引き上げていけるか。

職場から「合理化」に抵抗を

第二は、JRの仲間の労働強化についてどうやるかなんです。これは今、国労だけじゃない。最初は国労だけ差別をうんとしていました。もちろん今でも差別はありますが、しかしJRとすれば、JRに働いている労働者全体を今締めつけて「合理化」しています。だから、東京駅長みたいなでかい駅長は別にして、五、六人の駅の駅長はみんな不満を持っていますよ。五十三、四で肩たたかれるわけですから。つまり徹底的に「合理化」が行われているわけですから、その「合理化」に国労がどういうふうにもつときめの細かい、私がいいかげんに言っているやつじゃなくて、皆さんが本当に職場の事情を点検して「合理化」にどう抵抗するか、そこを皆さんが本当に工夫してもらいたいですよ。

私はつい二、三日前に小田原で「まなぶ」の会に行っただけです。びっくりしましたが、八十人ぐらい集まりましたね。そこには国労の熱海の駅とか、熱海の通信区とか、それからお金をつくる金印刷、小田原にあるんですけれども、その中にも我々の仲間はいるわけです。富士フィルムの中にもいるんですね。ちょっと脱線しますが、社会主義とか思想性というものがいかに大事かということを感じましたよ。それが結局みんなを支えているんだなあ。熱海とか小田原みたいなところでもそういうグループがいて、あんまり多数派にはなっていないけれども、それが運動をささえているなあという感じを持ちま

したね。

とにかくJRの職場の「合理化」にどう闘うかということに皆さんよく討論して決めてもらいたい。方針を出してもらいたい。それが一番ポイントじゃないですかね。それと今申した闘争団員の生活のことです。この二つを重く見たいですね。

国鉄闘争を横にひろげる

不当労働行為の判断は下されるだろうかという心配があります。そこで今言われた五年、十年かけてもあくまで中央労働委員会の命令を求めると。そこに皆さんが腹を決められるかどうかですよ。二、三年じゃそこまでいくかどうかは疑問に思います。もちろん時間的な問題は闘い方がいいかんにかかりますけれども、そういう意味で横に広げるという努力が国労としてまだ不十分だと思います。

不満を一つ言うと、きのう全労協の全国大会があった。国労から役員を出してくれと言われて、ついつい出しませんね。それは一体どういうことを意味するか。全労協というものができたときのいきさつとかいろんなことはあります。しかし今、全労協を軸にして広げない限りは広がらないですよ。もちろん全国各地で全労協をつくれと言っているんじゃないんですよ。つくる状況があるところもあるし、ないところもある。それは百も承知です。ただ中央の全労協と国労との関係というのをもっと大切にして、全労協にできるだけ協力しながら横に広げていくことをしなければ、私はだめだと思えますよ。その全労協の位置づけというものを十分、これはおそらく幹部の判断、仕事だと思えますけれどね、皆さん方自身がこれについてよくお考えになってみていただきたい。全国に広げると言っているんじゃないんですよ。状況のないところにそんなこと言ったって無理なんです。しかし中央では都労連と国労が全労協の軸になっているわけだ。それに幾つかの中小企業が加わり始めているんですね。だからこれは皆さん方がみずから決めることであるんですねども、とにかく横に広げるといふことの努力が私はまだ十分でないと思えます。

それは「連帯する会」もそうだし、名称はさまざまであるが、地方の共闘会議というのもあります。それから全国で共闘会議でも連帯の会でも皆さん方自身が歩いているかどうかなんです。それは正しいことはお互いみんな認め合っているんだと思えますけれども、おのれ自身が本当に努力して広げるように歩いているかどうか。そこがもう一つ私は不安というか不満というか、まだ広がるんだと思えます。

現場の労働者の気持ちを大切に

もちろん今のような状況ですから連合が邪魔する力としてはなかなか強い。だけれども我々国労は、中央の連合に対して批判するのはいいが、JR職場とか地域段階では、連合の労働者といえども仲間なんだという認識を持ちながら多数派をつくるように努力したいですね。これはJRの中でも同じです。「おれたち国労だけが正しい」というような姿勢をとるべきではない。反合というものを軸にしながら他の労働組合、連合の幹部が御用組合なだけであって、現場のほうは御用か御用でないかなんてのは関係ないわけです。ともにやられているわけです。だからJRの内部でもそうだし地域社会でも連合であろうがなかるうが広げていきたい。広げるように努力したい。

参院選で一定の前進を

そのときに関係があるのが農民のこととか、したがってコメの問題、農業をどうするかというようなことも地域社会へ行けば当然関係があります。そういうことをお互いがしっかり勉強し認識しながら地域にもっと広げていく。そういう力を広げていった地域活動の頂点にあるのが、とりあえずは参議院選挙なんです。おそらく衆議院選挙は来年あるでしょうけれどね。それで東京の場合は内田、そういうことを我々はきのうも申し述べたんです。

社会党の候補者は森田君というあの若い人ですね。タレントだからいけないというんじゃない。みんなお互いわかっているようにPKOに賛成とか、女性たちが猛烈に批判していますね。発言を見ていると、女性に対する差別意識をかなり持っているようです。わが方が推している内田という人は、若くて、元気で、しかも政策の点で明確にPKO反対の立場をとっています。この間、私は彼が立候補する集会に行っただけで、たくさんの市民団体の人が来ましたよ。その市民団体の女性たちは「地方区は内田、比例区は社会党」と言った。そういうことを言っている女性たちは、見たところ別に社会黨員じゃない。大体市民運動ですから無党派なんです。けれどもそういう雰囲気はプレスセンターが包まれました。一九六九年の美濃部が立候補して勝利したときの雰囲気と同じだという感じを私はそこで持ったんです。やり方によれば勝てるという印象を持ちましたね。それは社会党——社会党というよりは、連合の立場からいえばおもしろくないでしょうね。だけれども政策があまりにも違うから、仕方がない。

国労の闘争を勝利させるためにも、参議院選挙で一定の前進を勝ち取りたい。その場合に今社会党の内部は右・左という分け方じゃなくて、護憲派かどうかという分け方をするのがいいんじゃないかという印象を私は持っています。

PKO法案は「国家総動員法」

PKOで雑則の二十六条に驚くべき条文があつて私もびっくりしたんです。この条文はPKOそのものと関係ないんだと思うけれども、「民間の協力を求める」という条文があります。とりあえずPKOという軍隊をどこかに派遣するということが、物品の供与とか役務の提供、あまり関係ないと思うんだけど政府の連中のほうはそこまで考え布陣しているわけだ。戦争中の総動員法と全く同じです。役務の提供とか物品の供与についていくらか対価を払うという意味の条文がその次にある。しかしこれには驚きました。私も最近になってそれを知ったんです。

今私たちが直面している課題は、人権問題である、しかも階級闘争の先頭に立っている国労をつぶすという資本の側の布陣は、本当に軍国主義に一步踏み出したんじゃないかとさえ思います。まだ軍国主義という言葉は使いたくないんですけれども、言葉としてはたぶん政治大国、あるいは軍事国家に踏み出したというふうにいいように思います。これは誇張でないと思います。そしてそれがやがて軍国主義に転化していくんじゃないかというおそれを持っています。

力関係を変える視点を

そういう相手ですから、したがって国労闘争を勝利させるというのは、国労闘争、千四十七名を追求しているだけでは勝利しないと思うんです。階級関係の全体の力を向こうに押しつけていく。力関係を少しでも変えていくような視点に立っていなければならぬんじゃないか。もちろん国労の職場のほうにすぐその話をして無理があるんでしようけれどね。しかし、職場闘争を指導したり少しでも先頭に立っていかれる皆さんは、この闘争の置かれている状況をよく認識していただきたい。とことん攻めて、変な色をつけるぐらいじゃだめなんだと。これはすっきりして、そしてあくまで命令を求めるといふことに一本化していけば、何年か後にはそれは出るでしょうね。当然J R当局は裁判に訴えるでしょう。そうすると十年とか三年とか二年とか年数はかかります。しかしこの手の闘争は絶えず裁判に出ても和解という話はまた出てくるわけです。民間でもたくさん経験があるのでしよう。裁判に出ても和解というのはある。

和解というものを目をつけると言っているんじゃないなくて、長期の闘争ですからさまざまなことが起こるんです。しかし我々の側はあくまで元の職場に戻さない限りはいけなせんと。この一点で一致ができるかどうかだ。余分な雑音に迷わされることはないんだと。もちろんお互い人間だから、闘争団の皆さんが最後まで使ったスローガンに「早く」というのと「地労委命令どおり」という、これは一種の二律背反なんです。早く解決したというのは当然、私も早く解決したい。だけれども、二番目の中身を変なふうに妥協すれば国労はおかしくなりますよ。早くこの重荷をおろしてしまえば日常のJ R職場の問題をもっと聞えるんだというふうに考えたら、これは大きな間違いなんです。重荷をおろして楽になりたいという気持ちはお互い持つけれども、本当に原則どおりもとの職場に戻すというこの解決の内容が問題であって、その点をあいまいにして解決なんかしちまったら、国労はつぶれるというのおおげさかもしれないけれども、ほとんど権威がなくなるでしょうし、今までお互いが固まってきた心棒がなくなるわけですから、かなり打撃を受けると思いますよ。だからどうしても元の職場に戻せとことん押ししていく。今申したようにできるだけそれは早いほうがいいわけですから、できるだけ早いかどうかは、いかにして体制をひろげるかということにかかるといえます。

どうぞ皆さん、これから辛い闘争を闘うんですけれども、あんまり思い詰めてもだめですから、樂觀的に気持ちよくやっていきたいと思うんです。ただ若い人々ですから、闘争団の皆さんはいうまでもなく、J Rに働いている人だって手取りが十五、六万とか十七、八万というのは大変な生活ですよ。しかし、それでもなおかつ日本の労働運動を変えるためにはここで勝利をもぎとらなければいけないというかたい決意を、明るい顔で闘い抜いていきたいと思えますね。これで終わります。(拍手)

内田、栗原両候補を推せん

——全労協第四回大会の報告——

「広げよう全国へ自立と創造・労働者の権利を闘い取る全労協運動を」をメインスローガンに、全労協は七月三日から二日間、第四回定期大会を開いた。反PKO、国鉄闘争まつただなかでの大会であっただけに、論議はかつてなく盛り上がり、「全労協ここにあり」をアピールした大会となった。

連帯とは共に闘い、責任を分かち合うこと

大会冒頭あいさつに立った山崎議長は、春闘について「JCは金属疲労をきたし、電機でしびれて、NTTショックで管理春闘がいつそう強められた」一方、全労協を中心とする権利春闘グループ、春闘ネットの各団体は「率で五・四%連合を上回った」「闘えばとれるとの自身と確信を得た」ことをまず強調。時短では「心にゆとりと豊かさをもてる真の時短が必要」との認識を示したうえで、時短のたたかいの道は「時短と要員の確保、反合闘争との結合にある」と述べた。

さらにこの一年間、全労協が全力をあげてとりくんだ国鉄闘争については、中労解決案は「だんじて許せない」としたうえで、「闘争団の自活を支える体制をさらに強め、文字通り『連帯』して闘う」と述べるとともに、「『連帯』とはいっしょに闘い責任をもちあうことだ」と喝破。「国労と運命をともし、勝利するまで闘う」と結んだ。

護憲が大義

もっとも注目されたのが全労協の参院選への態度だ。全労協は、連絡協議会として反PKO闘争に文字どおり市民と労働者の接着剤の役割を果たし、その後、社会党がだれも予想しなかった闘いに立ち上がる触媒の役割を果たした。

あの社会党のたたかいぶりから、参院選東京地方区、広島で「PKO法賛成」の候補をおすことはまったくスジが通らない。反PKO法をたたかった市民そして護憲の政党员、議員は反PKO候補として東京で内田まさとし氏、広島で栗原きみ子氏を推立。森田、小西をおす党中央と真向から衝突した。世界の平和都市・広島では社会党県本あげて栗原支援の体制がつけられていたが、東京では社会党都本部委員長はまるで常気を失したかのようになり、「内田を推す社会党员は除名だ」と所かまわずわめきちらすという有様。山崎議長は、全労協として内田、栗原両氏を推せんすところ述べた。

「全労協は、PKOは成立しても闘いはこれからだとの方針をたてた。そのため、当面する参議院選挙に全力投球で、護憲議員の当選をめざし全力をあげてとりくむ。私は機関決定なしに選挙戦に臨みたいとの気持ちでいたが、いくつかの理由から推せん支持を決めたい。二つの選挙区で具体的候補者を推せんする。東京選挙区で反PKO候補者の『内田まさとし』さんと広島を代表する『栗原君子』さんだ」

このとき、議場からは「異義なし」の呼び声と拍手がまきおこった。全労協は連合や全労連のような単一の労働組合センターではなく、共通する課題で結ばれたゆるやかな連絡協議会との性格をもつ。にもかかわらず全労協が東京と広島で二人の候補を推せんしたのは、ことが平和憲法にかかわるからからであり、反PKO法のたたかいのなかで全労協が市民、学者、文化人そして現場労働者との間に、固い連帯の絆を生みだし、社会党の不退

転のたたかいてもあいまって反PKO法への世論形式に大きな力を發揮したからである。この意味で全労協第四回大会は、歴史的な意義をもつ大会となった。

あつてよかつた国労、全労協

この山崎議長のあいさつにみられるように、「あつてよかつた国労、全労協」との雰囲気のもと、議事は進んだ。

来ひんあいさつの一番手は岩井さん。「連合の矛盾は、原則、運動に確信をもって前に進みたい」と前置きし、「PKO法案、とりわけ雑則二十六条で日本は軍国主義の方向に一步足をふみ出したのではないか」「一概に連合選挙反対ではないが、はっきりしている(PKO法)賛成論者をおすことはできない。PKO法反対が社会党の方針にしたがつた道」と、山崎議長の英断に賛意を表するとともに、「(内田候補の出馬会見は)一九六九年のみのべ選挙に匹敵するもりあがりを感じた。なんとしても内田勝利をもぎとりたい」と、勝利にむけて力いっぱい奮闘を呼びかけた。

また国鉄闘争に連帯する二つの組織、国鉄闘争支援共闘会議の中里議長、連帯する会の山下事務局長は、国鉄闘争勝利にむけ闘争団への支援と連帯を討えた(その内容は前号の国労中央報告を参照)。

さらに市民派都会議員として反PKO闘争に、斉藤一雄代議士、国弘正雄参議院議員らとともに先頭に立った大久保青志氏は、PKO法について「アジアの民衆と連帯する運動をつくる」と述べるとともに、「あつてよかつた全労協、国労」と市民の期待は大きい」と激励した。

全労協の出番

全労協の方針は資料で全文(基調部分)紹介するが、その骨子は国鉄闘争を中心に春闘再生、反合・権利闘争、社会党の基本政策擁護、中小労働運動、女性の闘いの強化というものだ。

討論の焦点の第一は国鉄闘争。全国各地の代議員から「不当な首切りは認めないを原点に権利討論集会を充実させよ」「釧路闘争団を支える会は五百人を突破。サケを一十本売りに十人で現地と交流を計画。七十万円かかる、カンパもうけつるのでよろしく。」「JRの事故が多すぎる。安全白書をつくれ」といったように、厳しいなかにも笑いありの応答ぶりだ。

全労協への注文もあいついだ。「この機会に全労協の存在価値を發揮せよ」「全国指導の体制をもさくせよ」等々。こうした発言は、全労協発足三年、情勢の急展開で全労協の存在意義がにわかにクローズアップされてきたことによるものだろう。

はげしい論議があつたのが、内田、栗原せいせんについての議長あいさつだ。四人の代議員から「せいせんは深刻な問題をもたらす」との立場から、反対の意見が出された。全労協は「二重加盟」を認めている。したがって、その主張は全労連に加盟しているか、あるいは全労協に加盟することで組織分裂を回避している組織の人びとの発言だ。

このやりとりについては山崎議長が「二つの意見があつたが、反PKO候補をおし、平和と民主主義を守りぬく」「組織の事情でとりくめないところは、これは認め合い、反PKO、反戦の共通課題で奮闘し合う」と答弁、了解された。

全労協の中心組合は多くは中小。それだけに、権利(労基法改憲、臨時労働者、首切り

等々)、環境、女性の雇用差別には生々しい発言が相ついだ。春闘、反合・権利はここから始まるとの印象だ。

また大会には内田候補と元第一富士丸船長の近藤万治氏も出席。内田氏は「私の掲げる政策は社会党の政策そのもの」と討え、近藤氏は「自衛隊は国民を守るのではなく、組織をまもるためにのみある」と告発。闘争団の仲間とともに一途勝利にむけ前進すると二人の旗手は語った。

反連合「路線」を修正案で可決

——都高教定期大会の報告——

都高教の定期大会が、六月一八・一九日の両日に行われました。

都高教は日教組傘下の組織として、現在でもまともな運動が続けられている組合です。産別としての日教組は連合に加盟していますが、現在のところ、都高教は地方連合(東京連合)に加盟していません。三年前までは、執行部も「連合の地方組織には参加しない」と言っていました。ところが、このところそのような文言は言わなくなっていました。もちろん大会での運動方針案にも書かれていません。この点に関して修正案がかなり出されました。その中でつぎのような修正案が可決されました。

原案では「政治主義・イデオロギー優先では、団結をそこない、職場の権利も守れません。高い組織率も維持できません。そのことをしっかり押さえた都高教運動を進めます。」となっている文章がありました。この部分は原案の全体の文脈から考えると、共産党の政治主義路線を批判する意味合いをもっていました。ところが修正案は「従って政治主義・イデオロギー優先の『連合』、特にその地方組織である『東京連合』には加盟せず、都高教が中心となった『連合』運動に対する批判的のりこえを旨とした組織論を展開します。」の文言を原案のあとに付け加えるというものです。この修正案は、過半数を一二票上回る五〇三票という票数で可決されました。

このことよって、共産党の政治主義路線の批判という意味が殺され、逆に、連合こそ政治主義・イデオロギー優先だ、だから「東京連合」には加盟しないという内容になる結果となりました。執行部側にとってはにがにがしく感じる修正でしょうが、共産党系の労働組合が政治主義論なら、連合は、その何倍もの政治主義路線になると考えるのが、普通の代議員の感覚だと思えます。

また別のところの修正案では、「反連合(路線)を貫き、国労のたたかいに連帯し、都高教の原則を堅持しよう」(資料参照)という見出しをもち、全労協への評価を含めた部分、過半数をかなり上回る五七二票で可決されています。

この都高教定期大会の決定は、共産党の路線が勝ったということではありません。共産党のグループによる支持は受けましたが、修正案の提出者は共産党的なグループではないことでも明らかです。ちなみに共産党的なグループからの、連合問題に関する修正案は四八三票、八票差で否決されています。つまり、執行部側の、激しく共産党を批判することはやっても、連合指導部についての批判を抜くか、あいまいにするやり方が、大会代議員によって否定されたということです。大会のなかで、過去に共産党がストライキ闘争を妨害した点、主任制を容認する民主的主任論を展開した点などについて、執行部派の代議員

は激しく批判を展開していました。そして職場から闘っていく必要性（このこと自体は正しいことですが）を強調していましたが、その一方で連合指導部に対しての批判がなかったのは、共産党だけを激しく批判すると受けとられ、議員の不信をかたつたということでしょう。また、上部団体である日教組が連合に加入したからといって、分裂して別組織をつくるようなあり方には与しないけれども、自らの選択では連合の組織（東京連合）には加わらないという路線が代議員によって支持されたということでもあると思います。ともあれ、今大会で修正案が可決されることによって、運動方針でも、「東京連合」には加盟しない、反連合（路線）をつらぬく、ということが、文章上にも明記されたことになりました。

（東京・J）

資料 都高教大会「修正案」

以上の取り組みをすすめるためにも、その中心になる労働組合と労働運動を強化しなければなりません。PKO法案に反対せず、自衛隊の海外派兵を容認し、資本と協調する連合が政府・資本を助けていることが、ますます明らかになっています。連合路線と連合指導部を批判しぬくことは、現在特に重要です。都高教は「東京連合に加入しない」方針を堅持します。

地労委命令を全く無視した中労委の不当な「最終解決案」を、わたしたちは認めるわけにはいきません。国鉄労働組合は、「解決案」を拒否したたかいつづけることを表明しています。国鉄闘争への支援・連帯をつよめ、闘争団の生活とたかいつづけることを支える取り組みを強化し、都高教全体のものにしていくことが重要です。

総評の解散―労働戦線の混乱と再編を経験したいま、PKO反対・国労連帯の取り組みの過程で、労働運動の中に新たな結集とたたかひの流れが、全労協を中心に生みだされています。弱点を持ちながらも、豊かなたたかひの経験を有するわたしたち都高教は、たまたかう原則と大衆性を堅持して前進します。

「緊急通信」裏方繁忙記

「 пей、 пей、 пей、 ……」と何回押したことでしょう。五月二十九日から毎日FAXを両脇二台、四・五時間は押し続けました。

五月二十五日、「PKO法案廃案へ」を合言葉に集りに集まった六〇団体、一三〇人。日に日に増え続け、国会情勢を逸早く正確にメンバーに知らせるためにFAX通信を発信することにになりました。早々、デタラメな自公民修正案に対して、「国会解散」を呼びかけるため日刊で発行。「最新情報を」と催促の電話が昼夜鳴り続け、うれしい悲鳴でした。

議面待機者からの国会内情報の電話やいつもホットニュースを送って下さる堂本議員通信を頼りに、編集子が升目を埋めるが早い、ワープロをたたかひが早い、印刷・集会へ運搬、FAX発信打ちが早い、……。休日ナシの追いかけて四週間があげました。

皆さんの声で「緊急通信」縮刷版・領価二〇〇円（グラビア付）を小冊子で発行しました。ぜひ左記へ、ハガキでご注文下さい。

東京都大田区東矢口三三三―一五 教職員会館内「憲法を活かす東京の会」小峰宛

女性たちの熱い思いが燃えた!

——新宿歩行者天国の選挙風景——

参院選公示直後、地方に飛んだ。すべての人が、東京・広島で「反PKO候補が立ってくれて嬉しい」と語ってくれた。これぞ勇氣〇〇倍。「東京でもがんばる。あなた方は自民党を打ち負かしてくれ」と訴えた。

東京の選挙は従来のもとはまったくちがう。社会党都本部委員長は、「反PKO候補」推薦に名を連ねた七人の社会黨員に、「除名」をちらつかせる血迷いようなのだから。都本部委員長の言行が異常なように、選挙運動もたいへんユニークだ。「反PKO候補の当選を」と、若者・学生、市民、女性、文化人、労働組合員、そして社会黨員が「反PKO候補」当選にとたちあがった。地域で職場で、だれもがビックリする運動がくりひろげられている。

東京の公営掲示板は二万ちかくにのぼる。公示日、すべての掲示板にポスターがはりめぐらされた。「反PKO候補」の立候補声明は六月二十七日。ポスターの出来上りが公示前日というなかである。

私も街宣伝車に乗った。社会黨員をくふめ「憲法擁護こそ日本の生命、社会党の生命」と思いを抱く人が、「反PKO候補」当選に汗を流している。「ガンバッテ」と声をかけ、手を振る社会黨員たち。心の熱いものが走る。

「反PKO候補」のつよい応援団は女性たち。「戦争につうずるPKO法は絶対認められない」と、「くいとめよう海外派兵、活かせ憲法九条ノ反PKOノ」をスローガンに、「女たちのリレートーク」を、一九日の日曜日、新宿歩行者天国で開催した。

午後三時、「ストップ PKO」「われらゆるがず」。歌でオーブンクしたこの集いは、六時までの三時間、太平洋戦争を体験した女性たち。乳飲み児を抱く女性。無党派や社会党籍をもつ議員をふくめ、のべ三十人の女性が「なぜPKO法に反対か」「反PKO候補・内田まさとしへの一票で、自民党に鉄槌を」と語り、訴えつづけた。

トップバッターは本尾良さん。「女の力でPKO法を廃棄に。一兵たりとも自衛隊を海外に出すな。これが女の気持ち。」一番バッターの安増武子さんは、「よくぞ内田さんが立ってくださった。今度の選挙は主権者の出番」と、内田候補への支援をアピール。

圧巻は吉武輝子さん。彼女はPKO国会を終日傍聴席から監視。その怒りを全身にみながら、「数の力の暴力を国会でみた。国会内での自公民はすべてにファショ。社会党、社民連の牛歩はギリギリの抵抗。これでPKO法への疑問、批判、運動がもり上がった。内田さんの立候補で新たな希望がわき立った。内田さん、そして社会党、社民連候補を一人でも多く国会に送りこんで」と、仁王様もかくあるまいとの気迫で訴えた。

だれもがビックリしたのは、元首相・三木武夫夫人の睦子さんが内田候補応援のマイクをにぎったことだ。「私は根っからの平和主義者。日本は世界に誇る憲法をもつ。女は平和に徹して欲しい。平和のために、男をうまく説得を」と。三木夫人は「内田当選で風船玉のようにPKO法をしばませよう」と語った沢地久枝さんとガッチリ握手。PKO法は党派をこえた大問題、日本のゆくえを決する大問題であることを歴史に刻んだ一駒だ。

フィナーレは「ストップ PKO」「われらゆるがず」の大合唱。内田〇。PKO×のうちわがゆるるなか、吉武輝子さんが女らしいシユブ「ヒコールをと」「女たちは戦争への道を許しません。女たちは自衛隊の海外派兵を許しません。女たちはPKO法を認めません。女の手で、女と男の手で平和を。内田まさとしに勝利を。」と全都にびびけとばかりにコール。

道行く人もピンクのリボンの輪に参加。その輪は道路いっぱい広がっていった。あたかも東京、広島・勝利を予知するかのよう……。

第十八回先進国サミットと日本

世界の帝国主義体制に吸収された旧ソ連

米軍がベトナムから追い出されて半年後の一九七五年十一月、パリ郊外のランブイエに米、英、西独、伊、日六カ国首脳が集まった先進国サミット会議も、今年で第十八回目を数えるに至った。参加国もプエルトリコのサンファンで開かれた第二回からカナダが加わり、ロンドンで開かれた第三回にオプザバーで招かれたECが、ボンで開かれた第四回からは正式メンバーに加わって、首脳八人による先進国サミット会議は今や国連総会並みの国際年中行事になった。今年の第十八回の開催直前新たに独立国家共同体(CIS)のロシア連邦をメンバーに加える話がアメリカのブッシュ大統領から出されたが、この提案は会議では取り上げられた様子がなく、前年ロンドンで開かれたときと同様、会議は第一日目の七月七日午前正式メンバー国の首脳と外相で政治宣言を、翌八日午前各国蔵相を加えて経済宣言を採択して第一幕を終わらせた後、CISをまとめて代表した形のエリチン大統領を加えた第二幕を上演して閉幕した。第一幕は言うまでもなく二つの宣言を中心にした先進国の意志統一のデモンストレーションであり、第二幕は先進国グループとCIAとのエールの交換だった。

西側の報道は「去年はゴルバチョフ氏が客人として招かれたが、今年はエリチン氏が友人として招かれた」と書いたが、事前に議長国ドイツのコール首相がエリチン氏に「去年ゴルバチョフ氏は長々と弁明の演説をして話し合える時間が作れなかったが、同じことの繰り返しにならないことを願います」と伝えたという報道と読み合わせて面白かった。日本は領土問題解決を援助の前提にしているけれども、旧ソ連・東欧への援助計画はもう動かせないものになっていたのだ。果たせるかな「新しいパートナーシップの形成」を謳いあげた政治宣言と旧ソ連支援強化を確認した経済宣言は全面的なエリチン改革路線への支持声明のようなものだった。ドイツやフランスを中心に欧米各国とCISとの間で固まっていたものを先進国全体で確認した儀式にエリチンはひたすら感謝し、努力を表明すれば足りたのである。

サミットの性格に大きな変化

周知の通り、先進国サミット会議は、ベトナム敗戦で「世界の憲兵」の權威を失い、経済的にも行き詰まったアメリカとアメリカを軸に進んできた世界の資本主義の体制的危機に対処するため世界の資本主義の中心諸国が集まって話し合ったのが始まりで、毎年話し合いを続けてきたものである。言い換えれば、帝国主義諸国の体制的危機対策同盟といったところの代物が先進国サミット会議である。第一回サミットの当時は振り返れば明らかのように、ドル・ショック、石油ショックが世界の経済に大きな影響を与え、その建直しのために帝国主義諸国間の矛盾はカララでは解決できない状態に落ち込んでいた。会議の焦点が経済にあったことは当然だった。しかし、八〇年代に入ってレーガンが米大統領になって軍拡を進め、英国ではサッチャー政権が経済停滞解決に荒療治を強行し、日本では中曽根内閣が中央集権強化の行革を強行するという、独占資本擁護の新保守主義全盛の情

勢の中で、サミットも次第に政治色を強め、反共政治同盟という性格を強めた。ところが、八〇年代半ばを過ぎるとソ連でペレストロイカが始まり、東欧諸国の社会主義政権が崩壊し、東西ドイツがあつという間に統一し、遂にはソ連も解体してCISが生まれるという東半分の政治経済の大転換が起きる一方、西半分の帝国主義陣営の中も不況、累積債務、失業、飢餓、絶対的貧困、環境破壊など構造的矛盾が激化し、国際的摩擦と各国国内の社会的摩擦が厳しさを増していた。冷戦構造は崩れるべくして崩れた。そして先進国サミット会議は再び経済的危機対策同盟の本来の姿に戻ってきた。

先進国サミット会議開催中の新聞に、先進国首脳の会議のテーブルのシャンデリアに落ちそうにエリチンがしがみついている漫画が掲載されていた。つまり旧ソ連の経済改革が失敗すれば世界の経済に測り知れない混乱を起こすだろうということを描いたものだが、世界の帝国主義はもう少し奥の奥を考えているのではなからうか。それを解くカギは西側の必死とも思える東・中欧援助にある。

ロシア連邦を中心とする旧東側の広大な地域は測り知れない天然資源を持っている。貪欲な帝国主義にとつてこれが何よりも魅力である。そこには他に比較して高い教育水準と生活水準を持つ二億余の人民が生活している。その労働力は貴重であり、消費市場としての潜在的可能性も大きい。三極化して相互矛盾があらゆる面に摩擦を生み出している西側の資本主義体制だが、旧東側にかける期待では一致する。それは世界資本主義の利益に一致する。とりわけ地域統合で回生を目指すEC諸国にとつては、全欧統合の名目で一大市場を形成する好機である。東・中欧援助は単なる人道的援助ではない。美しいバラにはトゲがある。東・中欧を呑み込もうとしている西側の陰された意図をエリチンは知らないわけはないと思う。彼がIMFの要求に言葉も猛々しく反撃しているのは国際独占資本の本質を知っているからである。しかし、彼としては経済的困難からロシアを解放するには西側の援助に頼らざるをえないのであろう。そのエリチンに美しい衣をまとって摺り寄る帝国主義の危険を警告し、批判を続けているのが「保守派」と呼ばれる人々である。東側の併呑を推進する西側にとつては「保守派」は邪魔者以外の何者でもない。邪魔者からエリチンを守ることは西側の東・中欧戦略の重要なファクターになるのは当然である。だからこそ、先進国サミットの諸宣言はくどいほどエリチン政権の「改革努力」への支持を繰り返している。ソ連という国家は消滅した。そして今、第十八回先進国サミット会議はその経済が世界の帝国主義体制に組み込まれることを宣言したのである。

北方領土問題と日本の国家主義

国家主義の復活が進んでいる政府・自民党が冷戦の中で「北方領土問題」を反ソ宣伝の目玉にしてきたことは周知の通りである。冷戦の続いている間は、正に国際的な冷戦の枠組みと関わりなく議論できる問題ではなかった。ところが冷戦の終結によって問題を包み込んでいた国際的枠が崩れ、その解決は日本とロシア連邦との二国間の問題になった。別な角度で言えば、「北方領土問題」は冷戦時代には冷戦当時国との関係を抜きに解決はあり得べくもなかったが、冷戦が終わった今は何処にも気がねなく当事国である日本とロシア連邦の間で解決することができることになったのである。従って、いま何故それが先進国サミット会議の議題にされなければならないのか、疑問といわざるを得ない。

今年の先進国サミット会議における各国首脳の意識の焦点は、前述の通り、冷戦構造崩

壊後の新しい国際秩序の基礎として東・中欧を取り組んだ新しい世界資本主義市場づくりにあった。それが分からない宮沢首相ではなかったはずだが、何故あかも執拗に各国首脳に「北方領土問題」を帝国主義大国の共通課題にするように動き回ったのであろうか。

「北方領土問題」の解決なくしてロシアへの援助はあり得ないと言わんばかりに書き立てていたマスコミも、サミット会議が終わるとようやくそれが虚しい騒ぎだったことを書いていた。マスコミの無責任はともかく、世界の資本主義の大勢はロシア連邦を中心に東・中欧をその市場に取り組むことに集中しているのであり、日本もその流れにどんどん押し流されざるを得なくなったのである。

ひと頃、自民党筋から北方領土四島をカネで買う話が流れ、ロシア側の激しい反発があったことがある。今回は経済支援の前提条件に領土返還を打ち出したが、その発想の基礎がカネの問題と結びついていたことは、経済大国としてはそれ以外にチカラになるものがないとしても、余りに高利貸的ではなかったろうか。これでは国際的尊敬が得られるどころか、響響（ひんしゆく）を買いかねないことだった。さらに言えば、冷戦が消えた今も、日本政府は冷戦意識を清算しきれないで、対決姿勢を捨てていないという見方もできよう。

国連はアメリカとイコール

しかし、われわれはもう少し突っ込んだ見方をしなければならぬのではなからうか。今参議院議員選挙の重要な争点になっているPKO問題との絡みである。

PKO法案が国会で強行採決された翌日、韓国の民主勢力の声を代表するといわれるハンギョレ新聞の論壇に掲載された木浦大学の朴教授の文章を紹介しよう。「日本の右翼勢力は、旧ソ連の崩壊とドイツの統一を通して、今や戦後体制は終わった、従って戦後体制に依拠した国連も改編されるべきだと主張する」。すなわち日本とドイツは安保理の常任理事国になるべきだというわけである。「冷戦体制崩壊後、新世界秩序で日本の国家としての地位を引き上げる」というのは、正にこのことを指している。彼らが大声で叫ぶ「日本の新たな進路」とは「正に政治大国化、軍事大国化でしかない」。

国連はしばしば平和的手段よりも武力行使で紛争の解決を計ろうとしてきた。国連は朝鮮戦争で無理矢理「国連軍」を朝鮮に送り込んだ。その主役はアメリカだった。アメリカは国連の合意が得られないときにはその影響力の下にある帝国主義諸国を動員して「多国籍軍」を編成し、「国連決議」を大儀名分に中近東を軍事力で席捲した。その主役がアメリカだったことは周知の通りである。その国連の軍事力行使の是非を無視して、国連の活動に武装部隊である自衛隊を出すことが「国際貢献」だと強弁し、PKO法案を可決することによって憲法が「国際紛争を解決する手段としては……永久に放棄する」とした「武力による威嚇又は武力の行使」をすることを決定したのである。この「国際協力法」の底流に経済大国から経済大国を目指す国家主義の高まりを韓国の民衆は感じ取っているのである。おそらく中国、東南アジア諸国の民衆も同じ思いに違いない。

「北方領土問題」を騒ぎ立てたいなら、政府はすべての戦争の傷跡をきれいに清算する覚悟が必要であろう。ロシアにのみ清算を迫り、他のアジア諸国には贖罪を怠っているのでは世界が承知しないであろう。

(若林 熙)

◇読者からのおたより◇

参院選は国のゆくえを決める P K O法は違憲・違法・無効！ 国際協力は平和的に！
自衛隊のカンボジア派遣阻止！ 参院選が日本を変える、全力を！ (議員・H)

最悪の中労委案 最悪の中労委に燃えています。これからもよろしく！ (焼津・K)

編集部 「中労委案」をどうみるかについてはみんなが一致。問題はこれからどう闘うかです。岩井さんの提起を参照してください。

「ポスト活性化計画」 今年度、私たちの郵便局も「職場活性化重点推進局」に指定されました。当局のいう問題局ということであり、徹底した組合、活動家つぶしの攻撃です。北海道においても「始末書」や「訓告」などの処分攻撃が乱発されてきています。まさに、省当局の「ポスト活性化計画」の具体化であり、首切り合理化です。全国の仲間とともに闘いぬきます。あわせて「通信」拡大にもがんばっていきます。(全通・S)

編集部より 郵政の合理化。われわれ利用者にも犠牲がおよびます。JRもそうですが、一分、一秒をなぜこんなに急ぐのでしょうか。ハラが立つことばかり。全通は連合の一番弱い環です。組合らしい組合を求める伝統が職場には脈々と波うっています。関西・九州・東京でも新たなたたかい、権利拡大の声が高まっています。がんばろうよ！

五百号おめでとう さっそく『紙ひとえの選択』をお送りいただき、たいへんにご苦労さまです。また、社会通信発行五百号おめでとうございます。貴通信のますますの発展、継続をお願いし、働くことが労働者の生活、権利向上に結びつく社会・経済の仕組みになるよう、私もがんばる決意です。(秩父・U)

編集部より 「紙ひとえ」、読後感はいかがですか。

「紙ひとえ」ひろげる 「紙ひとえ」、さっそく送付いただきありがとうございました。職場の仲間に「ぜひ読んでほしい」と呼びかけています。(茨城・Y)

国労のみなさんがんばって 一万円送金します。残金はカンバします。国労の方々、たいへんたたかいでしょうが、最後まで闘いぬいてください。(教員・H)

新たな決意で 国鉄に入社して十一年がたち、ヤミ・カラ攻撃から十年が経過しました。広域で東京に来て、名簿登載の一人として、そして国鉄闘争を担う一人として怒りをおぼえざるをえない内容でした。闘う決意を新たにしています。北海道に帰るまで。(国労・M)

労組にシラケ・ムード P K O法案も通ってしまいました。しかし職場では論議されることもなく、それ以上に労組問題でシラケ・ムードが広がっています。私たち旗分会は今年二四年目を迎え、世代交替の時期にきています。今後もたたかいつづけるために、職場で「資本論」の学習会をおこなうことといたしました。若い人の学習意欲はすばらしく大いに期待しています。(神奈中の職場に権利を確する会)

森田君とはヒドイ 「紙ひとえ」はぜひとも書店店頭にならぶように工夫して下さい。ちょっともつたないような気がします。森田健作はひどすぎる。全動労も無神経のカタマリ。社会党もヒドイ。ヒドイ、ヒドイ時代です。ちゃんとした社会・労働運動の情報を知らせて下さい。(福岡・H)

編集部より 貴重なご提言ありがとうございます。近くの書店にはお願いしてならべてもらっています。